JARA 発第 2026-218 号
2026 年 11 月 13 日

公益社団法人 日本ローイング協会
強化委員会

2026 年　強化活動総括

2026 年シーズンは、2028 年ロサンゼルスオリンピック（以下「2028 年 LA 大会」という。）に向けた競技力の現状を把握するとともに、2026 年アジア競技大会を重要なマイルストーンとして位置付け、2025 年 10 月に発表した『強化戦略計画』を踏まえ、現在の国際競技力や資源、課題を踏まえ、「身の丈」を考慮した強化活動とするための『選択と集中』を図り、実効性の高い活動の推進を掲げた。
特に、重点強化種目への資源集中、派遣種目を継続強化するなかでのオープンカテゴリーの基盤強化、及び 2032 年ブリスベンオリンピックを見据えた次世代選手の発掘・育成を推進するシーズンとなった。

2025 年 11 月 26 日付「2028 ロサンゼルス大会に向けた基本的な考え方」（以下「LA 大会に向けた基本方針」という。）に基づき、男女シングルスカルを重点強化種目とし、派遣種目を通じたクルーボートの強化、世代別の継続的な育成、所属団体との連携強化、及び強化活動における PDCA サイクルの定着を基本方針として活動を進めた。

2026 年アジア競技大会では、目標としていた出場した全 10 種目で A 決勝に進出し、男子シングルスカル、女子軽量級ダブルスカル及び女子クォドルプルで銅メダルを獲得した。一方、獲得メダルは銅メダル 3 個にとどまり、前回大会の銀メダル 3 個・銅メダル 1 個を上回ることはできなかった。また、シニア世界選手権、U23 世界選手権及び U19 世界選手権においても、設定した目標に到達できなかった。

これらの結果から、国際大会への派遣やトレーニングの継続に加え、世界の強豪国との競技力の差を客観的に把握し、その差を縮めるための施策を具体化することが必要である。特に、トレーニングの質と成果の検証、選手の主体性と競争意識の向上、データに基づくコンディション管理、及びナショナルチームと所属団体が一体となった強化体制の構築が重要な課題として確認された。

本総括では、2026 年シーズンの成果と課題を整理し、2028 年 LA 大会出場枠獲得に向けた取り組みと、2032 年ブリスベン大会以降を見据えた継続的な強化の方向性を示す。

1. 強化方針に基づく種目編成と国際大会の成果

1-1　重点強化種目の成果と課題

『LA 大会に向けた基本方針』に基づき、男女シングルスカルを重点強化種目として、競技力の向上と 2028 年 LA 大会出場枠獲得に向けた取り組みを進めた。

シニア世界選手権では、男子シングルスカルが 37 艇中 20 位となり、A 決勝進出を目標とする方針に対して未達となった。女子シングルスカルについては 2026 年 3 月の 2026 年ローイング日本代表候補選手選考大会での評価からも派遣を見送り、重点強化種目として男女双方の競技力を評価・強化するうえで課題が残った。

一方、アジア競技大会では男子シングルスカルが銅メダルを獲得した。しかし、欧州遠征やワールドカップ第1・3戦の結果を世界選手権での競技力に直結させることはできず、世界の上位水準との差を縮めるための取り組みが必要であることが明らかになった。

今後は、日本代表候補選手選考大会を起点として、エルゴメーターの記録、水上パフォーマンス及びレース内容を定期的に測定・評価し、2028 年 LA 大会の出場枠獲得水準及び世界ローイング選手権での上位進出水準との差を明確にする。その上で、フィジカル、テクニック、レース戦略及びコンディショニングの各側面から課題を特定し、選手・クルーごとの強化に反映する。

特に 2027 年世界ローイング選手権は、2028 年 LA 大会の出場枠獲得に向けた重要な機会である。目標と現状の差を継続的に確認し、評価結果に応じて強化計画を見直すことで、目標達成に向けた取り組みの実効性を高める。

1-2 派遣種目とオープンカテゴリーの強化基盤

2028 年 LA 大会に向けては、重点強化種目への資源集中と並行し、派遣種目の強化を通じてクルーボートの競技力向上とオープンカテゴリーの選手層の拡充を図る方針としている。

2026 年シーズンは、日本代表選考及び 6 月の欧州遠征における評価を踏まえ、女子ペアを重点強化種目と同等の位置付けで世界ローイング選手権に派遣したが、18 艇中 18 位となった。一方、男子ダブルスカル及び男女フォアについては、欧州遠征・ワールドカップ第3戦の評価に基づき世界ローイング選手権への派遣を見送った。その結果、これらの種目では世界ローイング選手権での強豪国と直接比較する機会や国際経験を得る機会が限られた。

クルーボートの強化にあたっては、個人のエルゴメーター出力や水上の個々の評価だけでなく、クルーとしての艇速、技術、協調性及びレース展開を総合的に評価する必要がある。SBS のランキングや個人の能力をクルー編成に活用するとともに、ペア等による組み合わせの評価を通じて、将来性を含めた選手の適性を確認することが重要である。

また、国際大会への派遣は、派遣自体を目的とするのではなく、事前に設定した目標に対する成果を検証し、その後の強化活動につなげることが必要である。2027 年以降は再度派遣前にクルーとしての評価と目標を明確にし、派遣後には結果やパフォーマンスデータを分析することで、種目ごとの課題と強化の優先順位を整理する。

加えて、今後は『強化戦略計画』の示す国内大会での成績をアジア地域の国際大会への派遣につなげる仕組みについて段階的な制度化を検討し、重点強化種目・派遣種目に準じる選手層にも継続的な国際経験を付与する。併せて、派遣種目を担当するコーチの経験蓄積と、ナショナルチーム及び所属団体の役割分担の明確化を進め、かつ、指導者育成委員会とも連携した指導者育成機会をも付与し、2032 年ブリスベン大会以降を見据えたクルーボートの強化基盤を形成する。

1-3 アジア競技大会の成果と課題

2026 年アジア競技大会は、2028 年 LA 大会に向けた重要なマイルストーンとして、出場全種目の入賞及び前回大会を上回るメダル獲得を目標に取り組んだ。

結果として、出場した全 10 種目で A 決勝に進出し、男子シングルスカル、女子軽量級ダブルスカル及び女子クォドルプルで銅メダルを獲得した。強化活動の『選択と集中』を図る中ではあるが、全種目で A 決勝に進出したことは一定の成果である一方、メダルは銅 3 個にとどまり、前回大会の銀 3 個・銅 1 個を上回ること

はできなかった。国別メダル順位も 8 位となり、1982 年以降で最も低い結果となった。

日本チームの出場種目の金メダルとのタイム差の中央値は、2018 年が 2.9%、2023 年が 2.6%、2026 年が 2.8%であり、直近 3 大会で大きな変化は見られなかった。ただし、大会での開催種目構成が異なるため、この数値だけで日本全体の競技力が維持されていると結論付けることはできない。また、軽量級種目の減少や、中国に次いでウズベキスタン、イランなどのアジア地域にて各国の強化が進んでおりメダル順位に影響した可能性がある。

今後は、アジア競技大会でも原則オリンピック種目を派遣するとともに、各種目の競技力を国際的な視点から評価し、世界水準との差やアジア地域における他国の成長を把握する機会として活用する。大会結果を重点強化種目及び派遣種目の選考・強化方針に反映するとともに、国内大会から国際大会への派遣につながる仕組みを検討し、国内での競争環境と国際経験の双方を充実させる。

2. トレーニングの質とパフォーマンスの向上

2-1 強化メソッドの実施とトレーニングの質の改善

3 月の日本代表選考会以降、新体制の下で Max ヘッドコーチが推奨するプログラムを基礎に、強化委員会及び関係委員会、専門家の意見を踏まえてトレーニングプログラムを改訂した。2026 年 3 月の 2026 年ローイング日本代表候補選手選考大会以降からシニア・U23 世代のフィジカル及びテクニックの向上に取り組み、U19 世代についても 6 月以降、新たな強化フェーズに向けたトレーニングプログラムの改訂を進めた。

一方、定められたトレーニングを実施すること自体が目的となり、選手が各メニューの意図を理解し、目的に対して最大限の成果を追求するという点に改善の余地があることが確認された。

特に水上トレーニングでは、個々の選手が自らの課題に集中する傾向があり、同一クルー内や他の選手との競争を通じて互いの能力を引き上げる取り組みが十分ではなかった。また、高強度のインターバルトレーニング等においても、設定された負荷を完遂するだけでなく、目標レートで最大限の艇速を追求し、各本の再現性を高めることが求められる。

ストレングス&コンディショニング(S&C)については、協会が配置するトレーナーによるプログラムをシニア・U23 世代で実践した。また、6 月の欧州遠征後半及びワールドカップ第 3 戦にはフィジカルトレーナーが帯同し、現地でのサポートに加え、世界の強豪国の体格やフィジカル水準を確認した。こうした知見を今後のトレーニングプログラムの改善に反映する必要がある。

今後は、トレーニングの実施量だけでなく、実施の質と成果を評価する仕組みを強化する。エルゴメーター及び水上パフォーマンスの定期測定を実施し、トレーニングの目的、実施状況及び結果を選手・コーチ・所属団体間で共有することで、強化メソッドの実効性を高める。

2-2 選手の主体性と競争意識の向上

強化現場では選手の意思決定、自己省察、自己管理及び競争意識を含むパフォーマンス・マインドセットの醸成が、今後の強化に向けた重要な課題として確認されている。

国際大会で上位に進出するためには、トレーニングを受動的に実施するだけでなく、選手自身が目的を理解し、困難な状況においても主体的に課題に向き合い、結果を振り返って次の行動につなげる姿勢が必要である。また、同一クルーや他の選手との競争を通じて互いに高い水準を求めること、トレーニング中に有効

なフィードバックを行うこと、国際大会のプレッシャーに対処するための自己管理方法を身に付けることも重要である。

これらは選手個人の意識だけに帰するものではなく、コーチング方針やチームの文化、強化活動の環境全体に関わる課題である。コーチ・スタッフは、選手が自ら考え、判断し、失敗から学びながら挑戦を継続できる環境を整えるとともに、目標とする競技力に必要な行動や姿勢を明確に示す必要がある。

今後は、競技成績やフィジカルの測定結果に加え、トレーニングへの主体的な取り組み、自己管理能力、クルー内での協働及び競争への姿勢についても、強化活動における日々のミーティング、チームビルディングなどの研修機会にて継続的に発信を予定している。

3. データに基づく強化とコンディショニング

3-1 トレーニングデータの取得・管理と活用

2026 年シーズンは、心拍計によるトレーニングデータの取得や朝の体調チェック等を通じて、選手のコンディション及びトレーニング状況の把握を進めた。

分析対象となった選手 18 名のうち 17 名で心拍計の連携を実施した一方、朝の体調チェックは延べ 896 日分の記録が残ったものの、入力率の中央値は 36%にとどまった。また、体調報告に対する確認記録 263 件のうち 212 件が特定のコーチによるものであり、確認業務が特定の担当者に集中していた。

計画された持久系トレーニングの記録については、代表合宿中の計画に対する記録割合が 83%であったのに対し、合宿外では 46%であった。合宿外の数値には、所属団体での練習内容の違いや記録の欠落も含まれるため、実際のトレーニング量の差をそのまま示すものではない。しかし、代表チームと所属団体の間で、トレーニングの意図、実施状況及び記録方法を共有する必要性が改めて確認された。

今後は、冬季シーズンより代表候補選手に対して、速やかに心拍計の連携及び必要な測定情報の登録を行うとともに、エルゴメーター、水上パフォーマンス、トレーニング量、心拍及びコンディション情報を一体的に管理する仕組みを整備する。測定項目、実施時期、記録方法及び評価基準を統一し、選手、担当コーチ及び強化スタッフが共通の指標を用いてトレーニングの効果を確認できるようにする。

データを取得すること自体を目的とせず、測定結果に基づいてトレーニング内容を改善し、競技力の向上につなげる運用を確立することが重要である。

3-2 コンディショニングと自己管理能力の向上

国際大会で成果を上げるためには、競技力の向上に加え、選手が自らの身体状態を理解し、トレーニング負荷と回復のバランスを適切に管理することが重要である。

2026 年アジア競技大会の決勝日において、調子の指標である TSB（Training Stress Balance：心拍数より指標化）がプラス範囲にあった選手は記録を確認できた 14 名中 8 名であり、マイナスの状態で決勝を迎えた選手も 4 名いた。ただし、この数値だけで個々の選手のパフォーマンスへの影響を断定することはできない。トレーニング負荷、回復状況及びレース当日の状態等を併せて評価する必要がある。

今後は、選手の体調報告を確認する担当者と確認方法を明確にし、選手自身が体調、疲労及び回復の

状態を把握して、必要に応じてコーチと協議できる環境を整備する。また、休養、栄養、水分補給及び暑熱環境への対応も含め、自己管理能力の向上を図る。

コンディションに関する情報は、選手のプライバシーに配慮して取り扱い、必要な関係者が適切に活用できる管理体制を構築する。

4. ナショナルチームと所属団体の連携

4-1 トレーニングの一貫性と情報共有

代表選手の継続的な強化には、代表合宿や海外遠征の期間だけでなく、所属団体における日常のトレーニングを含め、一貫した強化を行える体制が不可欠である。

2026 年シーズンは、6 月欧州遠征に 3 名の派遣種目コーチが帯同し、ナショナルチームのコーチと連携してクルーの指導を担当した。また、アジア競技大会では、10 種目のうち 7 種目について、所属団体の指導者 5 名が派遣コーチとして選手の指導を行った。春先から大会派遣クルーの所属団体の指導者が主体的に選手・クルーの状況を把握し、強化活動を進めたことは、連携を進める上での成果であった。

一方、重点強化種目・ナショナルチームの海外遠征がアジア競技大会直前まで継続したこともあり、派遣種目コーチとの連携や、選手に対する一貫した指導には改善の余地が残った。また、S&C を含むトレーニングの目的や期分けについて、所属団体との共有が十分に進んでおらず、トレーニングプログラム同様代表活動以外の期間に一貫性を保つことが課題となった。

今後は、ナショナルチームと所属団体との定期的なミーティングを継続し、選手の目標、トレーニング計画、測定結果及び必要なコンディション情報を共有する。ヘッドコーチが示す強化方針について指導者間の認識を合わせ、代表活動と所属団体での活動が相互に補完し合う体制を整える。

4-2 サポートコーチ制度の活用（2026 年シーズンは派遣種目コーチに該当）

サポートコーチ制度は、代表選手への継続的な指導を支えるとともに、ナショナルチームの強化メソッドや国際大会で得られた知見を所属団体へ還元する上で重要な役割を担う。

今後も、サポートコーチの合宿・遠征への帯同を継続し、ナショナルチームと所属団体の間で指導内容や評価結果を共有する。また、所属団体での日常的な指導で得られた知見を代表活動に反映させるなど、双方向の連携を進める。

さらに、サポートコーチ制度を次世代の指導者育成にも活用し、国際大会での指導経験や専門知識を蓄積・共有することで、将来にわたって強化活動を支える指導者基盤の充実を図る。

5. 次世代選手の育成とコースタル競技の強化

5-1 U19・U23 世代の競技力向上

2026 年シーズンは、U23 及び U19 カテゴリーの選手を国際大会に派遣し、将来の日本代表選手の育成に取り組んだ。一方、U23 世界ローイング選手権では、男子シングルスカルが 23 艇中 16 位、女子シングルスカルが 20 艇中 14 位、女子ダブルスカルが 15 艇中 15 位となり、設定した目標を 3 種目とも達成できなかっ

た。国際大会の経験値付与を目的に 8 月 World University Championships では女子シングルスカルにて銅メダルを獲得した。
女子シングルスカルについては U23 世界ローイング選手権から時差調整に難航したが U23 世界ローイング選手権で自身のレベルを確認し、8 月の WUC での高パフォーマンスに繋がった。次年度以降は予てから懸案となる U23 世界ローイング選手権前の海外での事前レースの設定なども検討が必要となった。
U19 世界ローイング選手権においても、男子シングルスカルが 25 艇中 18 位、女子シングルスカルが 26 艇中 20 位、男子ダブルスカルが 31 艇中 22 位となり、設定した目標を 3 種目とも達成できなかった。

これらの結果から、年代別カテゴリーにおいても、選手層の拡充、選考方法、クルー編成及び国際経験の蓄積について検証が必要であることが示された。

今後は、U19 世代ではローイングの基礎技術、身体づくり及びトレーニング習慣の定着を重視し、U23 世代では国際レベルに対応できるフィジカル、技術及びレース戦略の獲得を重点的に推進する。特に U23 世代は、2032 年ブリスベン大会に向けた重要な育成段階であることから、シニア世代との合同合宿や国際大会への派遣を通じ、世界水準のトレーニング及び競争環境を経験する機会を充実させる。この点は 2027 年シーズンより具体的に実行を図る予定である。

5-2 長期的な育成パスウェイの整備

2028 年 LA 大会に向けた重点強化と、2032 年ブリスベン大会以降を見据えた選手育成を両立するためには、各年代の強化活動を独立した事業として捉えるのではなく、選手が段階的に成長し、シニアカテゴリーで国際競技力を発揮できる仕組みを更に整える必要がある。

今後は、日本版 FTEM の考え方を参考に、年代ごとの育成目標と評価項目を整理し、フィジカル能力、技術、競争への姿勢、自己管理能力及び将来性を総合的に評価する仕組みを検討する。育成合宿や国内大会、アジア地域の国際大会を活用して幅広く有望選手を発掘するとともに、クルーボートを含めた多様な種目で評価する機会を充実させる。
特にタレント発掘先進国であるイギリス、オーストラリアなどが取り組む種目最適化型のタレント発掘事業においては 2026 年 4 月より専門スタッフの配置を行い、具体的な取組を展開したが高身長・高フィジカルな有望選手の発掘には至っていない。今後も継続した取り組みを検討している。

また、J-STAR プロジェクト、JOC エリートアカデミー事業及び U23・U19 トールタレントプログラム等との連携を進め、高体連・大学カテゴリーとの協力も強化する。発掘から育成、シニア代表への移行までを一貫したパスウェイとして整備することで、短期的な大会結果だけでなく、中長期的な競技力向上と選手層の拡充を図る。

5-3 コースタル競技の強化

2028 年 LA 大会におけるコースタル競技の実施を踏まえ、男女ソロを重点強化種目として位置付け、シニアカテゴリーでは CMPA 制度を活用した強化体制の構築及び強化事業を推進した。
2026 年シーズンは、World Rowing Beach Sprint Finals(世界選手権)において目標とする成績には至らなかったものの、CMPA 制度を通じた継続的な強化活動により、選手及びユニットの競技環境への適応力向上など一定の成果が認められた。一方、国際競技力のさらなる向上に加え、強化体制や制度運用面における課題も明らかとなり、今後の改善が必要である。
今後は、2028 年 LA 大会でのベスト 8、さらに 2032 年ブリスベン大会でのメダル獲得を見据え、CMPA 制度を基盤とした重点強化を継続するとともに、国際競技力の向上に向けた強化環境及び指導体制の充実を図る。また、コースタルローイング委員会と強化委員会の連携を一層強化し、強化計画、選考、派遣及び活動評価の仕組みを整備する。

併せて、U23・U19 カテゴリーについても、将来を見据えた育成と国際経験の機会を確保し、クラシック種別と共通する基礎的競技力及びコースタル特有の適応力を備えた選手の育成を推進する。

6. 選考・評価制度及び強化マネジメントの改善

6-1 選考・評価の客観性と透明性の向上

重点強化種目への資源集中と、派遣種目・次世代選手の育成を両立させるためには、選考・評価制度の客観性と透明性を高めることが重要である。

今後は、SBS のランキング、エルゴメーターの記録、水上パフォーマンス及びクルーとしての艇速を総合的に評価し、選考段階ごとの基準を明確化する。合宿参加者の選定においてエルゴメーターの記録を重視する場合も、前シーズンの水上成績や冬季水上の評価結果を段階的に反映し、SBS との結果の間に大きな乖離が生じない仕組みを検討する。

また、競技力だけでなく、トレーニングへの取り組み、自己管理能力、協調性及び指導内容を実行する能力についても、選考・育成上どのように評価するかを整理する必要がある。

評価基準は、選手及び関係者にとって理解しやすいものとし、重点強化種目の短期的な成果と、派遣種目及び次世代選手の中長期的な育成との両立を図る。シニアナショナルチームについても A・B・C 代表の区分に応じた活動目的と派遣基準を明確にし、限られた強化資源を効果的に活用する。

6-2 PDCA サイクルの定着と強化体制の充実

「LA 大会に向けた基本方針」では、毎年、合理的な目標設定と成果の確認を行い、選手・コーチ陣・強化マネジメントチームが三位一体となって着実な進歩を図ること、また、リソースの充実と人材の適材適所への配置を通じて新たな体制を構築すること、さらに、選手及びナショナルチームの成長を可視化することを、PDCA サイクルの定着に向けた基本方針として示している。

これを踏まえ、強化戦略計画に沿って、2025 年 11 月以降、ヘッドコーチ、シニアコーチ、パスウェイコーチ・U23 コーチ、HPAD、情報科学スタッフ、EA コーチ及びコースタル情報科学スタッフなど、専門性に応じた人材配置と強化体制の充実を図り 2026 年シーズンに突入した。

この体制整備は、2028 年 LA 大会に向けた 4 年間の強化にとどまらず、各専門人材の知見を活かし、4 年・8 年・12 年先を見据えた計画的な強化施策を実行することを目的としている。選手の発掘・育成からシニアの競技力向上、データ分析、パフォーマンス評価及び強化事業の運営まで、各専門領域が連携して取り組むことにより、強化活動を継続的に改善し、組織として成長できる基盤を整える。

今後は、種目別・年代別の目標、評価指標、測定時期及び改善方針を毎年の強化計画に明記し、活動の実施状況と成果を定期的に検証する。選手、コーチ陣及び強化マネジメントチームが共通の目標と評価情報を用いて進捗を確認し、必要な改善を速やかに実行できる運用を確立する。また、選手個々の成長とナショナルチーム全体の競技力の推移を可視化し、強化方針や資源配分の判断に活用する。

一方で、専門スタッフの配置が進む中、各スタッフの役割と責任の明確化、専門領域間の連携、業務の優先順位付け及び稼働負荷の平準化は、引き続き取り組むべき課題である。配置する人材の専門性を十分に発揮できるよう、担当業務と意思決定の範囲を整理するとともに、特定のスタッフに業務が集中することを

避け、組織全体として安定的に強化事業を推進できる運営体制を整備する必要がある。

こうした体制整備と PDCA サイクルの定着を一体的に進めることで、単年度の大会結果にとどまらず、強化活動の成果と課題を組織的に蓄積し、次年度以降の計画に反映できる仕組みを構築する。これにより、計画的・安定的な強化活動を継続し、2028 年 LA 大会及びその先のオリンピックサイクルに向けた持続的な競技力向上を目指す。

7. 2027 年シーズンに向けた重点課題

2027 年シーズンは、2028 年 LA 大会の出場枠獲得に向けた極めて重要なシーズンとなる。2026 年の結果と分析を踏まえ、次の事項を重点課題として取り組む。

第一に、重点強化種目の競技力向上である。
男女シングルスカルを中心に、エルゴメーター及び水上パフォーマンスを定期的に測定し、世界の出場枠獲得水準及び上位進出水準との差を明確にする。その結果に基づき、フィジカル、テクニック、レース戦略及びコンディショニングを含む種目別の強化計画を実行する。

第二に、トレーニングの質と評価の改善である。
トレーニングの目的と評価基準を明確にし、実施量だけでなく、水上での成果や再現性を評価する。選手の主体性と競争意識を育む環境を整えるとともに、測定結果を継続的なプログラム改善に活用する。

第三に、選考・強化プログラム、派遣制度の改善である。
SBS のランキング、エルゴメーターの記録及び水上パフォーマンスを総合的に評価し、選考の客観性と透明性を高める。派遣種目については、派遣前の目標設定と派遣後の検証を徹底し、競技力向上と中長期的な選手育成の双方につなげる。

第四に、データ管理とコンディショニングの体制整備である。
心拍計、エルゴメーター、水上パフォーマンス及び体調チェックの測定・記録方法を統一し、代表合宿中と合宿外を通じて所属団体や関係委員会とも連携し継続的にデータを蓄積できる仕組みを整える。選手の自己管理能力の向上と、必要な支援を適切に行える確認体制の構築を進める。

第五に、所属団体との連携及び次世代育成の充実である。
ナショナルチームと所属団体の間でトレーニングの意図や評価結果を共有し、継続性のある強化を実現する。併せて、U19・U23 世代の選手層の拡充、国際経験の蓄積、コーチ育成及びコースタル競技の強化を進め、2032 年ブリスベン大会以降を見据えた競技力の基盤を形成する。

第六に、専門人材を活かした強化マネジメントの確立である。
2026 年 11 月以降に整備する強化体制について、各スタッフの役割と責任、連携方法及び業務の優先順位を明確にする。専門性を活かした適切な人材配置と稼働負荷の平準化を進め、選手・コーチ陣・強化マネジメントチームが一体となって目標設定、実行、評価及び改善を行える運営体制を構築する。

これらの取り組みを通じて、2027 年世界選手権におけるロス大会出場枠の獲得を目指すとともに、強化活動の成果を継続的に検証・改善し、2032 年ブリスベン大会以降も見据えた計画的・安定的な強化基盤の形成を進める。

おわりに

2026 年シーズンは、アジア競技大会で全 10 種目がＡ決勝に進出した一方、メダル獲得数・色及び主要世界ローイング選手権の成績において、設定した目標を達成することができなかった。これらの結果を真摯に受け止め、現状の競技力と世界水準との差を客観的に把握し、強化活動の質を高めていく必要がある。

今後は、2028 年 LA 大会重点強化種目への資源集中を進めるとともに、2032 年ブリスベン大会に向けた派遣種目の強化、次世代選手の育成、データに基づく評価及び所属団体との連携を一体的に推進する。また、専門スタッフの役割と責任を明確にし、各専門領域の連携と適切な人材配置を進めることで、強化活動を継続的に改善できる組織体制を整える。

大会結果と日々の強化活動を結び付け、選手・コーチ陣・強化マネジメントチームが共通の目標に向かってPDCA サイクルを実践することにより、2027 年世界ローイング選手権における 2028 年 LA 大会出場枠の獲得を目指す。

併せて、2028 年 LA 大会に向けた短期的な成果だけでなく、4 年・8 年・12 年先を見据えた選手・指導者の育成と強化体制の充実を図り、持続的な競技力向上につなげていく。

以　上